

はじめに

教育学部教育改善委員会委員長 日隈正守

2018年度の教育学部教育改善委員会は、昨年度の委員会活動を踏まえながら、数々の改善を行ってきました。今大学は、厳しい状況の中で社会の様々な要望に応えていかなければならなくなってきました。このような中で教育学部教育改善委員会は、以下の活動を行いました。

1. 昨年度に引き続き前期・後期の授業公開を行うとともに、受講生が10人以上の全ての授業でアンケートを前期・後期に取りました。
2. 夏季休暇中には、京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部で開催された「学生FDサミット2018夏」へ学生FD委員が過去最大3人参加しました。
3. 学生主催による教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウムを開催しました。
4. 教員対象に「学生による剽窃を防止するためには？」という題で講演会を行いました。
5. 例年と同様教育学研究科のFDのために、アンケートを実施しました。

まず授業公開は、一昨年度以降前期・後期ともに行っていて、本年度も前期・後期実施しました。この目的は、広く教員の授業改善に役立てるためです。授業参観をやすくするために報告書は、従来より簡素化した昨年度を踏襲しました。

今年度は、受講生が10人以上の1人で担当している全ての授業を前期も後期も授業アンケートを取りました。従来は前期も後期も各教員各々1授業を選んでアンケートを取っていましたが、今年度は受講生10人以上の1人で担当している授業は全部アンケートを取りました。このことは教育学部における授業アンケートとしては画期的でした。そして授業アンケートの評価が最も良かった教員を教育学部ベストティーチャー賞候補者として全学に推薦しました。今後授業アンケートを1人でも多くの教育学部教員が授業改善に活用することを期待します。

今夏京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部で開催された「学生FDサミット2018夏」には、学生FD委員が過去最大の3人参加し、大学の課題について参加大学の教員・職員・学生が対等の立場で議論しあいました。この経験を活かして学生FD委員が中心となり12月に教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウムが開催されました。本年度のテーマは、「いい授業ってどんな授業？」、「新しい授業の形を考える」であり、終始学生FD委員により運営されました。名実ともに学生FD委員により主催されたシンポジウムになって意義深いものになったと思います。

教育学部学生が卒業論文を提出する1月には、鹿児島大学高等教育センター伊藤奈賀子氏に「学生による剽窃を防止するには？」というテーマで講演をしていただき、学生の剽窃行為を防ぐためには教員の様々な配慮が重要であることが指摘されました。この講演を出発点として教育学部教員による学生の剽窃更衣を防止するための取り組みが今後行われると確信しています。また例年のように教育学研究科におけるFDのためにアンケートが取られ分析されています。

以上鹿児島大学教育学部教育改善委員会は、これ迄の委員会の活動を踏まえながら、今年度は活動内容を幾等かは改善してきました。しかし未だ改善すべき課題が我々の眼前に存在しています。今後の教育改善の筋道を示すために、今年度の委員会の活動報告を行います。

目次

第一部 鹿児島大学教育学部の教育改善に関する活動報告

1章 授業アンケート回答の分析

1 実施方法	1
2 実施状況	1
3 質問項目と集計方法	2
4 結果と分析	2

2章 平成30年度教育学部授業公開報告

1 授業公開の実施計画	4
2 授業参観の実施状況	4
3 授業参観報告書における記述（一部を抜粋）	5
4 授業公開に関するまとめ	5

3章 教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウム

1 シンポジウムの目的	6
2 合同FDシンポジウムテーマ設定について	6
3 今年度の合同FDシンポジウムの概要	6
4 全国学生FDサミット参加者による活動報告	7
5 グループによるディスカッションと終業後の参加者の感想	7
6 まとめ	7

4章 学生FDサミット2018夏 in 京都光華女子大学「壊して作れ!! ～やる気と無気力の壁～」

1 引率教員の報告	9
2 学生FDサミット参加の報告及び感想	11

5章 今年度の学生FD活動を振り返って

1 はじめに	17
2 これまでの学生FDの活動と新たな取り組み	17
3 今年度の教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウムについて	18
4 おわりに	18

第二部 鹿児島大学大学院教育学研究科の教育改善に関する活動報告

1章 平成30年度教育学研究科教育改善のための調査

1 はじめに	19
2 調査の方法	19
3 調査の結果と考察	19
4 おわりに	23

編集後記 25

1章 授業アンケート回答の分析

1. 実施方法

本年度より学習支援システム manaba を活用して実施した。

対象科目は、原則として、受講生が10名以上の教育学部開講科目とし、オムニバス科目や他学部開放科目等での実施については担当教員の判断とした。

実施期間は、前期後期ともに講義終了日前の2週間とし、授業終了前の10分間を利用して実施するよう依頼した。

また、実施教員への授業アンケート結果のフィードバックについては、教員個人が自身のmanaba上で確認することに変更した。なお、前年度までは、アンケートの実施結果を教育改善委員会が集計し、結果を希望の先生に伝えていた。新たな取り組みとして、結果に対する学生へのコメントをmanaba上で「教員からのコメント」として返すこととした。コメントの期限は前期後期ともに成績の締め切り日とした。

2. 実施状況

前期および後期それぞれの実施状況を表1に示す。受講生10名以上且つ5名以上の回答があった科目の割合を、教員のアンケート調査実施意思の指標とみなして昨年度と比較すると、前期71%、後期68%と昨年度の60.9%より高い値を示した。集計方法が異なるため、厳密には比較できないが、昨年度より上昇傾向にあると考える。いずれにしても学部全体の授業改善という点で、引き続き実施率を高める努力が必要である。

また、前期と後期を比較すると、前期の方が実施率、フィードバック率ともに高かった。前期は、アンケートの実施を催促メールにて何度も案内したことが実施率アップにつながったものと考えられる。現状では頻繁な案内メールが必須である。

最重要課題は、学生に対してフィードバックを返す教員の割合を高めることにある。アンケート調査の目的は、教員が自らの授業について調査結果を元に振り返り改善することであるが、前期16%ならびに後期9%という結果からは、「授業改善を検討したがフィードバックは返していない」教員の数を考慮したとしても、授業改善のために調査結果を分析した教員は少なかったものと推察される。

表1 授業アンケートの実施状況（左：前期，右：後期）

平成30年度前期授業アンケート実施状況

	総数	学生回答	%
全科目	423	285	67
対象科目 (教育学部教員 (卒論演習等除く))	333	225	68
10人以上受講の科目	173	165	95
10人以上受講の科目 (且つ5名以上回答あり)	173	122	71
フィードバック科目	32		8
フィードバック教員(全教員)	16		11
フィードバック教員(教育学部)	15		16

平成30年度後期授業アンケート実施状況

	総数	学生回	%
全科目	469	215	46
対象科目 (教育学部教員 (卒論演習等除く))	391	173	44
10人以上受講の科目	202	137	68
10人以上受講の科目 (且つ5名以上回答あり)	202	52	26
フィードバック科目	12		3
フィードバック教員(全教員)	8		6
フィードバック教員(教育学部)	8		9

3. 質問項目と集計方法

質問項目は、表2に示す通りとし、内容を昨年度から5割程度変更した。昨年度と同じ質問項目は二重下線で、変更したが同様の質問項目は一重下線で示す。各質問に対する回答は、表の選択肢の番号を点数とし、全回答の平均値で示した。参考に、昨年度までの平均値（本年度調査に合わせて換算）も掲載した。

なお、質問項目12は、ベストティーチャー賞候補者選出に際して評価する数値として位置付けた。

表2 授業アンケートの質問項目と実施時期別の平均点

		H30後	H30前	H29	H28
Q1	<u>授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか？</u>	1.59	1.43	1.34	1.24
	1: そう思う, 2: だいたいそう思う, 3: あまりそうは思わない, 4: そうは思わない ノーカウント: わからない				
Q2	<u>授業中は能動的に学ぶことができましたか？</u>	1.64	1.67		
	1: そう思う, 2: だいたいそう思う, 3: あまりそうは思わない, 4: そうは思わない				
Q3	<u>授業内容は理解できましたか？</u>	1.72	1.72	1.50	1.49
	1: そう思う, 2: だいたいそう思う, 3: あまりそうは思わない, 4: そうは思わない				
Q4	<u>第1回から最終回までの授業を体系的に理解することができましたか？</u>	1.70	1.71		
	1: そう思う, 2: だいたいそう思う, 3: あまりそうは思わない, 4: そうは思わない				
Q5	<u>シラバスに記載されている学習目標を達成できましたか？</u>	2.03	1.79		
	1: そう思う, 2: だいたいそう思う, 3: あまりそうは思わない, 4: そうは思わない ノーカウント: わからない				
Q6	<u>教師の説明は分かりやすかったですか？</u>	1.57	1.62	1.32	1.30
	1: そう思う, 2: だいたいそう思う, 3: あまりそうは思わない, 4: そうは思わない				
Q7	<u>資料（板書、プロジェクター、配布資料等）の内容は授業の理解を助けるものでしたか？</u>	1.54	1.57		
	1: そう思う, 2: だいたいそう思う, 3: あまりそうは思わない, 4: そうは思わない				
Q8	<u>授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか？</u>	2.04	2.02	1.57	1.57
	1: そう思う, 2: だいたいそう思う, 3: あまりそうは思わない, 4: そうは思わない				
Q9	<u>授業時間外に教師に質問をしましたか？</u> (オフィス・アワーやメール・manaba上での質問も含む)	1.86	1.85		
	1: はい, 2: いいえ				
Q10	<u>この授業について毎週平均でどのくらい予習・復習をしましたか？</u>	3.32	3.32		
	1: 3時間以上, 2: 3~1時間, 3: 1時間~30分, 4: 30分未満				
Q11	<u>授業はあなたの興味関心の増大や知識の獲得など、自分にとって得るものがありましたか？</u>	1.58	1.60		
	1: そう思う, 2: だいたいそう思う, 3: あまりそうは思わない, 4: そうは思わない				
Q12	<u>授業は全般的にみて満足するものでしたか？</u>	1.57	1.60		
	1: そう思う, 2: だいたいそう思う, 3: あまりそうは思わない, 4: そうは思わない				
Q13	<u>この授業の良かった点や感想等を自由に書いて下さい。</u>				
	自由記述				

※二重下線：前年度と同じ質問，一重下線：前年度と同様の質問

4. 結果と分析

昨年度と同じ質問項目で比較すると、本年度は全4項目で低い評価となった。昨年の調査で

第一部 鹿児島大学教育学部の 教育改善に関する活動報告

は、1人1科目で実施したのに対し、本年度は受講生10名以上の全科目を実施対象としたこと、また manaba で実施したことから教員からの指示の無かった科目についても回答があったこと等の調査方法の変更が評価を下げることに繋がったものと推察する。調査を継続し、引き続き改善方法を検討したい。

全般的に見ると、「そう思う」から「だいたいそう思う」と比較的高い評価だった。各項目の包括的な質問12に注目すると、全体平均が1.6弱だったのに対し、上位5名の教員（回答学生が前期後期合わせて5名以上あった教員）の平均値は1.07と差が大きかった。これは、多くの授業で内容改善の余地が残されていることを示している。高評価の授業を参観するといった取り組みが期待される。

評価の低かった内容として、「この授業について毎週平均でどのくらい予習・復習をしましたか?」、「授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか?」、また「シラバスに記載されている学習目標を達成できましたか?」が挙げられる。昨今求められている単位やシラバスの実質化といった課題が教育学部でも見られた。加えて、オフィスアワーの活用も評価が低く、全般的に見て課題は昨年と同様だったと言える。今後は、これらの課題に的を絞った取り組みも必要になるだろう。

以上、授業改善に向けて、実施方法や授業内容について改善可能な点が示された。

2章 平成30年度教育学部授業公開報告

1. 授業公開の実施計画

(1) 授業公開の目的と枠組み

鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針にあるFDの定義には「大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上をはかるとともに、学生支援を行う自発的な取組」とあり、各教員が自発的に自身の教育方法を向上・改善させて行くことが求められている。また、本学部の教育改善委員会においても「教員同士が相互に授業を公開・参観することにより、各教員が授業方法・授業運営の改善をはかり、教育の質的向上を目指す」ことを目的として設定し、今年度も授業公開・参観を実施した。

(2) 授業公開の実施手順

今年度は、昨年見直しを行った、授業の性質上、進行上の都合などにより授業公開できない科目の調査を行い、それ以外の科目に関しては授業者へ事前連絡をしなくても参観することができるようにするという方法を踏襲した。加えて、昨年度4月以降に入職された新任教員に、本学での授業に役立てていただけるよう、個別にメールで授業参観への呼びかけを行った。

(3) 授業公開不可科目調査

事前に教授会で実施手順について説明したのち、前期授業公開については6月27日(水)～7月4日(水)、後期授業公開については11月28日(水)～12月5日(水)の期間で授業公開不可科目の調査を行った。調査内容は、①公開不可の授業科目名(曜日・時限・科目名)、②参観者を受け入れられない理由の2点とし、該当する教員が直接授業公開担当者にメールで連絡することとした。調査の結果、前期では公開不可科目はなく、後期では2科目が授業公開不可科目として届けられた。公開できない理由としては、「学外で授業を行うため、期間中の1日のみ受け入れられない」や、演習の授業において「授業内容により参観スペースの確保が難しいため」といった事情が挙げられた。なお、すべての教員が1つ以上の科目で授業を公開した。

(4) 授業公開不可科目一覧と授業参観報告書書式の提示

授業公開不可科目調査の結果と授業参観報告書の書式を全教員宛にメール添付で送信し、授業参観をした教員は、授業参観報告書をメール添付、あるいは教務係に準備した回収箱に紙媒体で提出することとした。

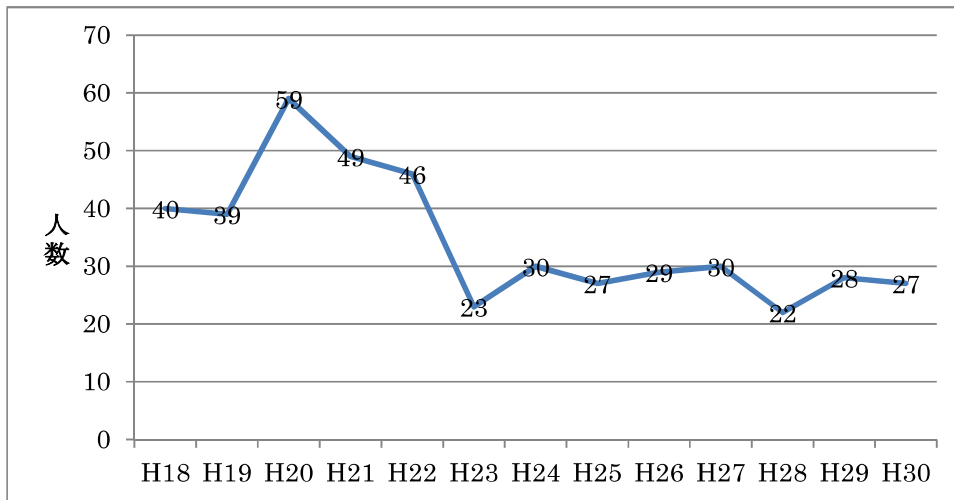
(5) 授業公開および授業参観の実施

前期は7月9日(月)～23日(月)、後期は12月10日(月)～21日(金)に実施した。そして、授業参観報告書は前期が7月25日(水)、後期が12月25日(火)を提出期限とし、教育改善委員会が集約した。

2. 授業参観の実施状況

全専任教員92名(長期出張、産休等を除く)中、前期は17名(前年度19名)より18件、後期は10名(前年度9名)より11件の報告書が提出された。同じ専修・コースの教員が行う授業での参観は前期が9件、後期が4件、異なる専修・コースの教員が行う授業への参観は前期が9件、後期が7件であり、後期は若干、異なる専修・コースの教員が行う授業への参観が多い傾向が見られた。

表3 授業参観者の推移（前・後期合計のべ人数）



3. 授業参観報告書における記述（一部を抜粋）

（1）授業方法に関して

- ・授業時間中授業担当者は、グループ活動が活発に行えるように適宜助言を与え、授業終了前に用紙を配布して授業に対する受講学生の質問を集め、次回授業時迄に各質問に対して分かりやすく答えた回答書を準備している。
- ・テキスト以外にワークシートが準備されているので、考えた内容が蓄積され、客観化できると同時に、毎回の授業時の内容につながりができているように思いました。
- ・導入で、前回の復習とともに学生からの感想や疑問に対する回答を紹介したため、知識の定着や本講義全体の理解につながるとともに、本時の学習への意欲が高まったものと思われる。

（2）授業内容に関して

- ・スポーツと食事との観点から、栄養素について話された。幅広い内容であったが、適宜、実際にあった事例や良く知られているスポーツ選手の事例を取り上げられており、興味深く講義に参加することができた。
- ・担当教員からは、昆虫の飼育・後始末に関する方法についても専門的な知見の教授もあり、学校での生物教材の扱いについて、教科教育でも授業に入れられる有用な情報を得ることができた。
- ・本時は「紙すき」の最終場面であった。前時まで「紙すき」用の木枠や御簾を学生自ら手作りを終え、牛乳パックパルプの準備も整えられており順調な作業開始であった。

4. 授業公開に関するまとめ

教育学部の授業公開は平成18年度から開始され、今年度が13回目にあたる。平成23年度から授業参観の数は30件あたりにとどまっており、参観実施率は低いままである(表3を参照)。このような現状を考慮し、今年度は新たな試みとして、新任教員に対して授業参観への呼びかけを行ったが、対象となる新任教員10名のうち、前期は2名より3件、後期は1名より2件の報告書提出に留まったことから、メールによる個別の連絡も、授業参観の必要性を訴えるに十分な手段とは成り得なかったと考えられる。

3章 教育学部・教育学研究科合同 FD シンポジウム

1. シンポジウムの目的

鹿児島大学教育学部における教育活動について、実際教育を受ける学生がどのように感じているのか、どのような点に不満を感じ改善してほしいと思っているのかを学生側から提案し教員側と対等な立場で意見交換することにより解決を目指していくことがシンポジウムの開催目的である。同時に今後の教育学部における継続的な教育改善活動のための記録を蓄積・保存していくことも重要な目的である。

今年度のテーマ決定にあたっては、今年度は中島委員や日隈委員長のアドバイスを受けながら学生 FD 委員が中心となって行った。テーマ設定の経緯については、学生 FD 委員会からの詳細な報告をお読みいただきたい。なお、以下の2～6は、今年度の学生 FD 委員会吉田委員長と宅萬副委員長がまとめている。

2. 合同 FD シンポジウムテーマ設定について

今年度の学生 FD サミットは、「学生と教員がともに考える学び～作れ、新しい授業のカタチ～」をテーマに行った。従来までは履修支援のシステムや施設改善などのハード面について話し合うことが主に取り扱われていた。しかしながらそれらを改善するよう関係各所に働きかけてきたものの、予算が確保できないことを理由に改善案が却下されることがしばしばあった。また例年参加している全国学生 FD サミットでも、授業改善や学生と教員の間でのコミュニケーションといったことが話題に上がっており、学生 FD 委員会の従来の活動と本来求められている活動との間でずれがあるのではないかという意見もあった。そのため、今回は方針を転換し、よりよい授業とは何か、どうすればその授業を実現させられるかということを目指し、話し合いの場を設けることとなった。

3. 今年度の合同 FD シンポジウムの概要

- (1) 日 時 2018年12月11日(火) 15:00-17:00
- (2) 場 所 教育学部第二講義棟 講義室 B
- (3) スケジュール

時間	内容・担当
15:00-15:05	開会のあいさつ 吉田 朱理 (学生 FD 委員会委員長、心理学専修3年)
15:05-15:15	趣旨説明 宅萬 進太郎 (学生 FD 委員会副委員長、英語専修3年)
15:15-15:30	全国学生 FD サミット 参加者による活動報告 徳丸 明日香 (技術専修3年) 堀井 悠 (技術専修1年) 松木 菜那 (技術専修1年)
15:30-16:30	ディスカッション：授業のカタチを考える
16:30-16:50	全体発表
16:50-17:00	まとめおよび閉会のあいさつ 寺床 勝也 (教務委員長) 宅萬 進太郎

4. 全国学生FDサミット参加者による活動報告

まずは京都光華女子大学短期大学部にて開催された全国学生FDサミットについて、参加者による活動報告が行われた。報告の中では、学生FD活動が「授業をよくしたい」「大学をよくしたい」という学生と教職員の共通の目標の下にあることや、他大学の取り組みとして、学生と教員とがより盛んに交流するためにはどうすればいいか話し合われたことが紹介された。このような、他大学の行っている活動が学生FD委員を含め参加者にはとても新鮮に映ったのではないだろうか。また、鹿児島大学での活動の問題点として、学生FD委員会の委員選出方法も含め、学生が自主的に取り組んでいないことや、学生FD活動の認知度が低いことなども挙げられ、今後の課題が改めて浮き彫りとなった。なお、全国学生FDサミットの参加者の報告は、第4章に掲載されているので、そちらを参照されたい。

5. グループによるディスカッションと終業後の参加者の感想

グループ別にディスカッションを行うために、教員と学生が混ざった5~6人のグループを4つ作り、各テーブルに分かれてディスカッションを行った。ディスカッションを行う前に、各グループで自己紹介として「自分を動物に例えると何になるか」を紹介してもらった。そして、教員には「学生時代の思い出や頑張ったこと」を話してもらい、学生には「今までの学生生活を振り返って思い出に残っていることや、これからの目標」などを話してもらいながらアイスブレイキングを行った。

次に、ディスカッションのテーマとして「いい授業ってどんな授業？」について、各自で自由に付箋に1つずつ書いてもらい、模造紙に貼る作業を行った。その後、付箋の貼られた模造紙を相互に見学し、再度グループでディスカッションを続けてもらった。続いて、それらをカテゴリー別に分け、カテゴリーを代表することばを書いてもらった。さらに、その結果を元に「新しい授業のカタチを考える」のテーマで話し合いを行い、最後に模造紙を元にグループごとに発表を行ってもらった。それぞれのグループでは学生の視点から出る意見と教員の視点から出てくる意見とがあり、参加者は積極的に話し合いを行っていた。

FDシンポジウム終了後の感想としては、「学生も教員も勉強になる会だった(教員)」「教員の視点が学生とは違ってよかった(学生)」など様々な意見が出てきた一方で、今後の活動に対する意見として「活動をもっと広めてほしい」「内容を広く周知してほしい」といった声も聞かれ、今後の活動を深めることの重要性を痛感した。

6. まとめ

今年度は、学生FD委員を中心にテーマ設定を行い、学生と教員が考える「いい授業」とは何かをテーマを限定してディスカッションを行ってもらった。学生と教員が平等な立場で、さまざまな視点から授業について考える貴重な機会であった。例年と比べ、30分ほど時間を短縮して開催したため、グループディスカッションや全体的なまとめの時間がやや時間不足だったのではないと思われる。また、例年と同時期に開催したが、様々な事情により参加者が限定されてしまい、昨年同様に参加者は増えなかった。専修やコースの「壁」を超えて集まる機会を活かすためにも、開催時期や周知方法の改善が必要だと思われる。

第一部 鹿児島大学教育学部の
教育改善に関する活動報告

資料写真 合同FDシンポジウムの様子



写真1 全国学生FDサミットの報告



写真2 付箋に書き出す作業



写真3 付箋に貼って検討



写真4 他のグループの模造紙を見学



写真5 メモして自分のグループで検討



写真6 グループ発表の様子



写真7 グループ発表の様子



写真8 寺床教務委員長の総括

4章 学生FDサミット2018夏 in 京都光華女子大学「壊して作れ!! ～やる気と無気力の壁～」

1. 引率教員の報告

永迫俊郎

2018年8月28日(火)・29日(水)の2日間にわたり京都光華女子大学短期大学部において、2018学生FDサミット in 京都光華「壊して作れ!! ～やる気と無気力の壁～」が開催され、鹿児島大学教育学部からの学生3名を引率して筆者も参加した。FDといえば、義理の叔父に誘われアメリカ観光の一環で出席したアトランタでのPOD(The Professional and Organizational Development) Network 年次総会を除くと全く疎遠で、教務委員ながら代理で参加させていただいて貴重な経験ができました。教育改善委員会の活動をフォローできていない立場ゆえに、文脈から外れた理解や記載をしているおそれがあるものの、素人なりの着眼点にも意味があるのではと自らを鼓舞しながら率直に報告いたします。

2日間のスケジュール 1日目(8月28日)の12時から受付開始、13時から講堂(約1000人収容)でオープニングが行われた。学長の一郷正道氏、実行委員長の高畑亜実氏による挨拶に続いて、学生FDの父である木野茂先生によって学生FDについての解説(写真9)がなされ、記念写真の撮影(大講堂の特性を活かし2階から1階席の参加者を俯瞰)を含めて25分で終了した。その後、西五条通り(国道9号線)を挟んで北側のメインキャンパスに移動し13時45分から分科会が2会場で開催された。A会場では島根県立大学と嘉悦大学が、B会場では北翔大学と中京学院大学短期大学部が、それぞれの学生FD活動について報告を行った。

1日目17時30分からの情報交換会(カフェテラスでの懇親会)と2日目(8月29日)15時からの講堂でのクロージングを除いた、1日目15時15分から2日目14時15分頃までの時間帯は「しゃべり場」として、割り振られた6-7人のグループで「壊して作れ～やる気と無気力の壁～」をテーマに議論(写真10)を行い、2日目13時40分からは同じ教室内のグループごとに成果発表(写真11)を行った。教室はA～Hの8箇所、各教室の大きさを反映して5～7個のグループが設定された。グループ数は47にのぼり、8月29日付けの京都新聞記事によれば、全国の45大学・短大から学生や教職員約300人が参加したという。

1日目17時30分からの情報交換会(写真12)は予定通り19時にお開きになり、私たちはおとなしく帰路に着いたが、2次会・3次会と盛り上がった参加者もいたようである。2日目15時からのクロージングでは、A～Hの各教室で最優秀発表に輝いたグループが紹介され、学生FDサミット2019春(3月21・22日)を開催する島根県立大学への引き継ぎを挟み、2日間を振り返りつつ全員短大1年生で構成された実行委員会の奮闘ぶりが労われ、25分で終了した。

学生および自分の取り組み 毎年12月に開催される学部・大学院の合同FDシンポジウムに向けて教育学部では学生FD委員会が組織されており、この委員会の委員長と副委員長の学生を夏の学生FDサミットに派遣するのが常だったものの、集中講義と日程が重なり、学生FD委員の1人である技術専修3年の徳丸明日香さんが代行することになり、同専修1年の堀井悠さんと松木菜那さんが同行した。引率教員の筆者も実に頼りない中、3人は本当に頑張ってくれた。分科会では、A会場に徳丸さんと堀井さんが、B会場に松木さんと永迫が、それぞれ出席した。しゃべり場では、堀井さんA-6、松木さんE-1、永迫G-1、徳丸さんH-1と教室さえも

第一部 鹿児島大学教育学部の 教育改善に関する活動報告



写真9 学生FDの父による解説



写真10 5つのグループからなる清風館261



写真11 G-1グループの成果発表



写真12 情報交換会的一幕 (左3名が鹿大)

別々に割り振られたため、具体的な活動は不明ながら、ただただ圧倒されていたオープニングからわずか26時間後のクロージングでの彼女たちの目の輝きから、急激な成長の様子がみてとれた。それらの内実は、後述の感想を参照されたい。

筆者が宛がわれたG-1は清風館261という教室の5グループの一つで、1名欠席者がいて5名(学生3、職員1、教員1)で構成されていた。学生3名のうち唯一の男子がファシリテーターを自ら引き受けたが、1日目と2日目でやる気が全く違って、成果発表のポスター作成では他の女子学生2人がタグを組んで、前夜のフィーバーで燃え尽きた彼の穴を埋めていた。もう1人の大人である職員は、次回の開催校であることとキャンパスが3箇所に分断されていることから、学生との対話に熱心な方で、彼と筆者で学生主体の方向に持って行けたのは良かった点と捉えている。代理出席を言い訳にして恐縮ながら、学生FD活動に関する経験や知識が皆無で、議論の引き出しが極めて限定的だったことは大いに反省すべきである。

「壊して作れ～やる気と無気力の壁～」というテーマについて筆者が考えたことは、やる気を導き出せるような場・機会の提供の重要性である。専門である自然地理学に引き付けて説明すると、内的作用(外的作用・外来作用に対する)に火を付けること、そして存続を担保する多様性の尊重、ITの目まぐるしい発展で疎かにされかねない五感を駆使した直接体験の意義である。

学生FDサミットへのコミットメントについて 学生FDサミットは今回の京都光華で17回を数える。オープニングでの木野先生の解説によれば、教育を改革するための大学の組織的活動=Faculty Developmentは1970年代から欧米で始まり、日本では20年遅れて1994年に国が推奨、2008年から義務化された経緯があり、トップダウンのため教職員が受け身だという。「受益者」であり「主体者」である学生の立場からFDに取り組む「学生FD」が立命館大学で始められたのが2007年である。

こうした比較的新しい時流に乗って、継続的に学生を派遣しているのは素晴らしいと評価できる一方で、2つの側面から注文を付けたい。1つは、8月の学生FDサミットへの学生派遣、12月のFDシンポジウム開催、年度末の教育改善委員会活動報告書という一連の流れが、自主目的化してしまっているのではという懸念である。グループ討論の中で、本学での実践を述べる際にハッとした点である。もう1つは、学生FD活動をどのように継承していくかという観点を欠くように思われる懸念である。学生FD活動が盛んな大学・短大は、サークルのように就学期間内で継続させたり、学生バイトにして時給を支払ったり、小規模校だと原則全員参加にしており、すべてに共通する必須事項として熱心な顧問の存在がある。懇親会の様子から推察するに、顧問同士のネットワークが強固で、木野先生を中心に学生FDサミットが回を重ねている。2度3度と出席を繰り返して、名刺を拵えてやってくる常連校の学生の前に、初参加・1回きりの学生はどうしてもたじたじになってしまう。

学生FD活動それ自体が研究領域と密接に関わる教員がいたら、顧問として学生を引っ張ってもらうことで、活動の継続性が保たれると考えられる。今回8つの国立大学から3名以上の参加があったが、単独学部なのは2つに過ぎない。教育学部での取り組みは評価されるものの、全学を挙げた活動へと展開する道も検討すべきだろう。岡山大学を参考にすると、高等教育研究開発センターの関与が期待される。このように他力本願する思考に、FDのもつ受動性の根深さを露呈してしまうとともに、FDへの当事者意識を持たねばと反省させられる筆者である。

2. 学生FDサミット参加の報告及び感想

2018年8月28日(火)～29日(水)の2日間にかけて京都光華女子大学短期大学部において「2018 学生FDサミット in 京都光華『壊して作れ!!～やる気と無気力の壁～』」が開催された。鹿児島大学FD委員代表として、徳丸明日香(教育学部技術専修3年)、堀井悠(教育学部技術専修1年)、松木菜那(教育学部技術専修1年)、3名が2日間参加した。ここでは、3名それぞれの視点をもって、報告及び感想を詳述することとした。

○ 学生FDサミット参加の全体的な感想

技術専修1年 堀井悠

今回の学生FDサミットは京都光華女子大学/京都光華女子大学短期大学部で行われた。「壊して作れ!!～やる気と無気力の壁～」をテーマに、2日間にわたり分科会やしゃべり場を通して、FDの活動について、どうすればより良い大学にしていくことができるのかを考えることができた。

分科会では島根県立大学と嘉悦大学の2校のFD活動について聞くことができた。鹿児島大学では行われていない様々な活動が行われていることを知り驚いた。その後しゃべり場があり、他大学の学生・職員・教員混ざり合った班で「学生と教員の壁」「学生と職員の壁」について問

題点・解決策について話し合いが行われた。他大学の学生と会話をするのも新鮮だったが、職員や教員と同じ立場で話し合いをすることは初めての体験だった。最後には部屋ごとに話し合いの成果を発表し、様々な意見を聞くことができとても勉強になった。

今回のサミットを通して1番強く感じたことは「FD活動を行っている学生と一般学生との壁」だ。FD活動をサークルのような団体として考え、どうすれば大学がより良くなるかを考えている学生FDがいるなかで、FD活動そのものを知らないという学生がほとんどを占めていることが現状だと感じる。まずはFD活動を多くの鹿児島大学生に知ってもらうことが大きな課題になると感じた。

○ 各大学による分科会参加の報告及び感想

技術専修3年 徳丸明日香

学生FDサミット初日の分科会では、嘉悦大学・京都光華女子短期大学・島根県立大学・北翔大学が、自大学のFD活動を報告した。分科会は4団体が同時刻に2つの会場に分かれの開催だったため、学生FDサミット参加者はどちらかを選択して2団体の活動報告を聞くことができた。私は島根県立大学と嘉悦大学が活動報告する分科会に参加した。ここでは、次回のFDサミット開催地である島根県立大学の実態を報告し、その感想を述べたいと思う。

島根県立大学は“縁”という学生FDを組織し活動に取り組んでいる。分科会で“縁”は、理念と活動報告と今後の課題を発表した。“縁”は「学生と教職員がともに取り組む魅力ある大学づくり」「楽しく明るくのびのびと」「人と人をつなげる」「できる人ができるとき」という理念を掲げている。「できる人ができるときに」ということに関し、島根県立大学のキャンパス間の問題が挙げられた。島根県立大学はキャンパスが県内に点在しているため物理的にFD委員が集うことが難しいことより、できる人ができる時にということであった。

活動報告の中でも私の印象に残った活動は、“縁”による入学前のイベントの開催である。それは、入学式前に、入学生を対象に開かれたレクリエーションや交流会のイベントで、入学生の41%である50名が参加したようだ。参加した入学生からは「大学への期待が高められた」といった声を聞くことができ、また入学後に参加者同士の交流がみられ、イベントが会話の話題のひとつになっていたことより、今後も開催を予定しているという報告であった。

この分科会参加から、他大学の実態と抱えている課題を知り、鹿児島大学のFD活動の良い面や問題点、課題を見つめなおすことができた。そして、今後も鹿児島大学のFD活動がすべての学生のためになるように尽力して努める必要があると掻き立てられた。

○ 討論の具体的報告及び感想

技術専修1年 松木菜那

まず、しゃべり場について説明したいと思う。しゃべり場は教員3名、学生3名の計6名で1つのグループになり、サミットのテーマでもある「壊して作れ～やる気と無気力の壁～」について2日間にわたって各学校での取り組みを発表しあったり、議論したりする場である。1日目に議論をし、2日目には各教室で「壁を壊す取り組み」についてグループで出た意見を発表した。

私たちのグループは、テーマである壁について「壁は壊さずドアから入ろう」というサブテーマを決めて、3つの視点から議論した。1つ目の視点は学生と学生、2つ目の視点は学生と外

第一部 鹿児島大学教育学部の 教育改善に関する活動報告

(地域社会)、3つ目は学生と教員とした。以上3つの視点から議論しあった結果、最終的なまとめとしてあがったのは「FD についての認知度を高める」ことであった。このようなまとめを私たちのグループは各大学の取り組みを参考にしながら考えた。各大学の取り組みを聞く中で鹿児島大学のFDの状況と異なる点が多々あることに気づいた。鹿児島大学のFD活動は認知度が低く、教育学部内に留まり、活動が他の学生に見えにくいことがわかる。一方、私がグループのメンバーから聞いた取り組みは学生が主体的に集まりサークルとして活動している大学が多く、活動内容はしゃべり場を定期的に行ったり、学生が参加しやすいようなイベントなどを開催したりしており、認知度を高めるために全学部生にメールでイベントについて宣伝している大学もあった。

私の感想としては、しゃべり場は自分たちの大学の活動や問題点に気づけるだけでなく、他大学の取り組みについて知れるとともに普段の生活で議論しあうことのできない様々な地域の人たちと意見が言い合えるということに新鮮味があり、とても貴重な経験となった。このFDサミットに参加したことによって問題点が浮き彫りになったので、次のFDサミットに参加するときにはこの問題点が一つでも解消され、活動報告の時に他大学よりも多くの活動について説明できるようFDの活動を向上させてほしい。

第一部 鹿児島大学教育学部の
教育改善に関する活動報告

活動報告

鹿児島大学 教育学部 中等教育コース 授業専修
3 年 鹿 児 島 大 学
1 年 鹿 児 島 大 学
1 年 鹿 児 島 大 学

2018 学生FDサミットin京都光華 「環して作れ!! ～やる気と熱気力の壁～」

2018年 8月28日(火)・29日(水)
京都光華女子大学
京都光華女子大学短期
大学部

2日間のスケジュール

1日目		2日目	
8月28日 発 行	12:00～13:00	8月29日 発 行	09:00～10:00
オープニング	13:00～13:30	オープニング	10:00～10:30
分 科 会①	13:45～14:15	シャペリ権	10:30～13:30
分 科 会②	14:30～15:00	(昼食は各グループごと)	
シャペリ権	15:15～17:00	成 果 発 表	13:40～14:40
情報交換会	17:30～19:30	クローゼング	15:00～15:30

2018 学生FDサミットin京都光華

・FDサミットとは・・・
全国の大学から学生FD活動に取り組む
学生・教員・職員が一堂に会し、
各大学における**活動や成果を発表**し合い
大学教育における**課題等を共有**し、
議論する場

オープニング～FD父の言葉より～

共通の目標

- 1 授業を良くしたい
- 2 大学を良くしたい

FDサミットのメリット

- 1 「他大学から学ぼう」
- 2 「各大学から学ぼう」

生徒ではなく
学生として
自分の目で
考えられる学生に

分科会～島根県立大学“縁”～

理念
学生と教職員がともに取り組む魅力ある大学づくり

- ・楽しく明るくのびのびと
- ・人と人をつなげる
- ・できる人ができるとき

楽しく活動することで大学が
好きになる
学びやすくなる
働きやすい環境を創る

分科会～島根県立大学“縁”～
活動報告

入学前のイベント
入学生50名(41%)が参加

活動内容

- ・アイスブレイク (フルーツバスケット等のレクリエーション)
- ・しゃべり場「理想の大学生生活の実現」
- ・交流会

・大学生生活への期待を高められた
・入学後の参加者同士での交流がみられた

今後も開催予定

分科会～島根県立大学“縁”～
今後の課題

- ・キャンパス間の距離、隙間のないカリキュラム
- ・FDの集まりが難しい、学生の優り

FDが作成したパンフレット
教職員と学生の距離を近くするため...



しゃべり場

学生 職員 学生

テーマ
「填して作れ!!
～やる気と無気力の壁～」


学生 学生 教員



しゃべり場

ファシリテーターを中心に
学生・教員・職員の壁について
ディスカッション
問題点とその解決策を議論しまとめた

それぞれのグループが発表
意見の共有



しゃべり場 A-6班

学生と教員の壁

○問題点

- ・接点が少ない
- ・コミュニケーションを取りにくい

↓

○改善策

- ・教員がやっていることを知る
- ・ゼミ以外の教員との接点を作る
- ・学生にあったコミュニケーションツール



学生と職員の壁


○問題点

- ・なにを言っているのかよくわからない
- ・誰に相談していいかわからない

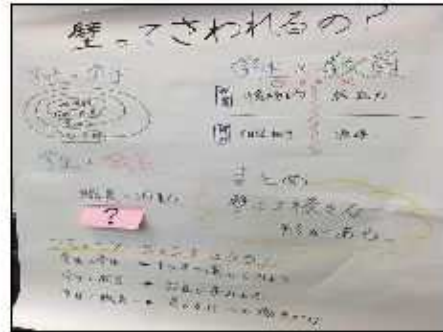
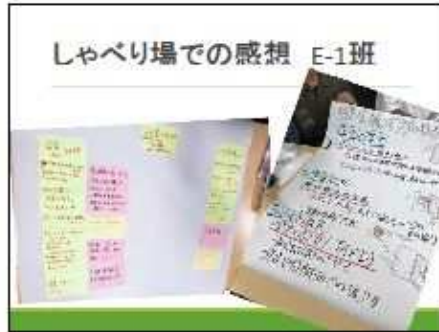
↓

○改善策

- ・無関心に関心!
- ・最初の一步を踏み出しやすくする



第一部 鹿児島大学教育学部の
教育改善に関する活動報告



FDサミット参加から見てきた
鹿児島大学FD活動の問題点

- FD委員
(鹿児島大学では教員が学生を誘致...)
他大学では学生が主体的に集まり活動
- 活動の認知度が低い。
どこでどのような活動をしているかが分からない。
- 鹿児島大学では教育学部内に留まる。
他大学では様々な学部の学生が集まりサークルのような集まり

自主的ではない
活動が見えない
学生の溜り

FDサミット参加から見てきた
鹿児島大学FD活動の今後の課題

- 自主的なFD委員の招集
FD活動に意欲的かつ様々な学部・学年の学生の招集
- FD委員の活動の「見える化」
活動内容をすべての学生・教職員が把握できるような取り組み



5章 今年度の学生FD活動を振り返って

教育学部 心理学専修3年 吉田 朱理
英語専修3年 宅萬 進太郎

1. はじめに

私たちが学生FD活動に関わり始めたのは2017年度になってからである。初めての活動で、活動当初は言われたことを言われるがままにやってきただけだった。しかしながら2017年度の活動の中では積極的に前に出ることができず、積極的に学生FD委員の活動に参加できていなかったと同時に、なぜこんなにも面白い活動が広く知られていないのかと残念な気持ちになった。この気持ちこそが、私たちが今年度活動する上での大きなモチベーションとなった。

2. これまでの学生FDの活動と新たな取り組み

従来、学生FD委員の活動は大きく分けて2つあった。1つは学祭の時期に行われるソフトボール大会の運営と、もう1つは、毎年12月の第2火曜日に行われている教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウムの運営である。

まず、ソフトボール大会は、教育学部祭や各専修の出店販売が終わる日に、各専修から任意でチームが選出され、教育学部グラウンドを使って行われる。当初はなぜ私たちがこの活動の運営をしなければならないのかと疑問に思うことがあった。しかし運営をしていく中で、気づいたことがある。それはこうした行事の存在自体が教育学部の雰囲気づくりにかかわっているということである。教育学部では課程制をとっているため、各専修の中で学生の雰囲気がとてもよいことが特徴である。専修ごとの学生数も比較的少ないため、そうした同じ志を持った学生が集まる環境を簡単に持ちやすいことが特徴だと言える。学生同士が1つの行事を通して交流することによって、親睦を深めるとともに、協働して1つの行事に参加し、運営をすることが、学部全体としての連帯感を高めているのだと、ソフトボール大会という行事の持つ重要性を認識した。このような場をコーディネートする力をつけることができるようになったのも学生FD委員としての活動があったからこそだと考えている。

次に、教育学部・大学院合同学生FDシンポジウムの運営も、教育学部だけで行われている活動である。これについては本報告書の第3章に活動の様子なども含めて報告しているので、そちらを参照されたい。

従来からあった上記2つの活動に加え、私たちが今年度新しく行ったのは、履修支援活動である。この活動を始めようと思ったきっかけは、教育学部のシステムが変わったことに対する私たち自身の危機感と経験にある。2016年度入学生までは入学時点で所属する専修が決まっており、その後のオリエンテーションでは学科の先輩と一緒に教育学部のカリキュラムについて要点を一つ一つ押さえながら時間割を作成するのが恒例であった。私たち自身も学科の先輩から一つ一つ手ほどきを受けながら、1年生の時間割を作成したことを鮮明に覚えており、このような良い伝統が引き継がれていのおかげで安心して学生生活を送ることができる土壌が作られていた。

しかし2017年度入学生からは状況が変化してしまった。入学者選抜の時点で初等教育コースと中等教育コースに分かれて募集がなされることになったことで、中等教育コースは1年生の段階から所属する専修が存在しているものの、初等コースの学生に関しては入学時では所属する専修が決められておらず、「先輩」と呼ぶことのできる学生が存在していなかったのである。

もっとも時間割はだれか先輩がいないと作れないものなのかと言われたら、決してそうではない。ほかの学部の教員からは、「教育学部こそ自分で時間割くらい作れるようにならないといけないのではないか」という厳しい意見をいただいたことがあった。しかしながら私たちが入学時に恵まれた状況にあったのかかわらず、後輩がそうした恩恵を受けられないというのは非常に不平等なのではないかと感じていた。

そのような危機感を持っていた中で、私たちはある1人の学生と出会いました。なんとその学生は履修登録が行われる当日に初めて大学に登校したというのである。しかも時間割を作成しなかったその学生は、隣に偶然座っていた学生の時間割をそっくりそのまま写してその場をしのいだというのだ。初等コースの学生は入学時から「クラス分け」がなされていて、担当教員がそれぞれ決まっていたが、教員によっては履修指導などの対応を全くとっていないという実状も判明した。このような状況が、私たちの履修支援活動に対する思いをより一層強くした。



写真 13 履修支援の様子

前期終盤、後期の初めの時期を使って、学生FD委員と話し合いを重ね、10月9日（火）から10月11日（木）の3日間、アクティブラーニングプラザの一角を使って履修支援を行った。事前にチラシを掲示したり、1年生に対してメールを配信したりするなどの広報活動を行ったところ、最終日に1名の学生が足を運んでくれたので、1時間ほど時間割の作り方や、教育学部のシステムを教え、履修相談を行った。この1人という数字は多くの人が少ないと感じるかもしれないが、私たちにとってはとても大きな1歩だった。新しい活動を始めることにはたくさんのエネルギーが必要だったため、日々暗中模索しながら最善の方法を探していた。最後まで納得のいく活動にすることはできなかったが、1つの活動を形にできたことは私たちにとってとても意味のあるものだった。

そしてこうした活動をする理由は「助けを必要としている」学生の存在によるところが非常に大きい。だからこそ継続的な活動が必要で、今後も発展的に継続して行われてほしいと切に願っている。

3. 今年度の教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウムについて

2018年12月11日（火）に行われた、教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウムについての活動報告は、第3章に記載しているので、そちらを参照されたい。

4. おわりに

1年間の活動を振り返って、改めて充実した1年間が送れたと感じると同時に、1年間の活動ではどうしてもやれることに限界があると感じた。今後私たちの活動を発展させるためには、1年間限りの活動にとどまらず、継続的な活動を行っていかねばならない。今後は私たちの活動を活用しつつ、教育学部での学生FD活動がより発展的な形で展開されることを望む。また、教育学部での活動をきっかけに、同様な活動が他学部にも広がっていくことを期待している。

最後に今年度の活動にご協力いただいた、中島祥子先生と日隈正守先生、そして準備に携わってもらった今年度の学生FD委員の皆さんへの感謝を記して、この報告書を締めくくる。

1章 平成30年度教育学研究科教育改善のための調査

1. はじめに

教育改善を図る上では、授業の提供者側である教師の視点のみならず、授業の受給者側である学生の視点も不可欠と考えられる。これまで教育学研究科では、教育改善の基礎的な資料を得ること目的として、大学院生を対象としたアンケート調査を実施してきた。現在、教育学研究科の専攻は、従来の修士課程に相当する教育実践総合専攻と教職大学院である学校教育実践高度化専攻（専門職学位課程）の2つである。平成30年度は、前年度に引き続き、教育実践総合専攻の大学院生を対象としたアンケート調査の結果を報告することにしたい。

2. 調査の方法

大学院生の教育状況に関する認識の内容と経験変化を探ることを主眼として、次のような方法で調査を実施した。

- (1) 教育実践総合専攻に所属する学生 1・2年次生 45名
- (2) 調査実施時期 2018年7月10日（火）～31日（火）
- (3) 調査実施方法 Web回答方式（匿名）
- (4) 通知方法 大学院教務係よりメール配信 44名（未登録者1名）
- (5) 質問項目 平成29年度の調査項目に準じる質問項目（表4）

表4. 質問項目の概要

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">0. 在籍学年について1. 研究科／教育実践総合専攻／学修コース共通科目の授業について2. 学修コース専門科目の授業について3. 研究・学習環境について4. 研究成果の発表について5. その他大学院での学習や生活全般について |
|---|

3. 調査の結果と考察

(1) 調査の概要

平成29年度までの調査とは、調査の実施時期や質問項目は同じであったが、今年度は調査用紙（紙媒体）の配布・回収方式から、Web回答方式（匿名）へと変更して実施した。今年度の回答者数は、1年次生6名、2年次生4名の計10名（22%）であり、平成29年度の13名よりも回答数が少ない結果となった。

(2) 質問項目に対する大学院生の感想や意見

授業や指導、学習環境に関する質問項目では、それぞれ満足している点や改善してほしい点を別の設問の形で尋ねた。

1) 研究科／教育実践総合専攻／学修コース共通科目の授業についての感想・意見

研究科共通科目、教育実践総合専攻共通科目、学修コース共通科目の授業について、大学院生から寄せられた感想および意見は、表5のとおりであった。

表5. 研究科／教育実践総合専攻／学修コース共通科目の授業についての感想・意見の実際

<p>[満足している点とその理由]</p> <ul style="list-style-type: none"> － 教科に偏らず「教育学」に特化して教育学を専門的に学べる環境。絶対に無くさないでほしい。 － 大学院らしい専門性の高い授業だから。 － 先生方が優しい － オムニバスの授業で普段は聞く機会のない話が聞けておもしろい。 － 教育実践総合専攻の共通科目では、今日の教育に関する最新の課題について学ばせて頂いています。現場で考えねばならない課題ばかりなので、ありがたいです。 － 理系棟の研究室が充実しているため研究や授業の予習復習がとてもしやすい － 新しい知見をえられているから、教育現場に対する問題を見つけるための視点をもたらせるから。
<p>[改善してほしい点とその理由]</p> <ul style="list-style-type: none"> － 時間がおそい － 9割がたグループ学習。ディスカッション。レポート提出。すべてがルーチン。「教育学」を専攻とする授業の在り方が果たしてこれがすべてでいいのか不明。学習成果の評定の基準もブラック。事象の表裏一体を実感する。 － 時間割がよく変更されること。シラバスをwebでも見たい。 － レポート等の評価基準を明確にしてほしい。 － 6限目を無くして欲しい。 ただ、これに関しては、現職の先生方も受講されてるので、仕方がないことだと思う教職大学院との交流があった方がいい。 － 授業開始時間をもう少し早くにして欲しい。バイトを行えず奨学金を借りないといけないため

表5から、研究科共通科目、教育実践総合専攻共通科目、学修コース共通科目の授業について、大学院生が満足している点は、第1に、授業の内容であり、第2に、他分野との接触・交流の機会であった。専門領域を横断して学ぶことのできる共通科目の特性が評価されていると考えられる。その一方で、大学院生が改善してほしい点として挙げているのは、第1に、授業開講の時間設定であり、第2、授業の方法や評価であった。共通科目は、その特性上多くの大学院生が受講できるような時間帯で開講されているため、6限での開講となっていることや教員の都合による時間割変更が頻繁に行われることが、アルバイトの時間の確保などの学生生活の基盤となる活動に影響するとの意見が見られた。それ以外に、授業の進め方が画一的であると感じていたり、レポートの評価基準に疑問をもっているなどの不満を感じていることも確認できた。6限での授業開講などは、社会人大大学院生の受講を考慮するとやむを得ない部分もあるが、時間割の変更という点については、大学院生のスケジュール管理などでもできるだけ配慮した開講時間の設定や周知が必要だと考えられる。

2) 学修コース専門科目の授業についての感想・意見

学修コース専門科目の授業について、大学院生から寄せられた感想および意見は、表6のとおりであった。

表6. 学修コース専門科目の授業についての感想・意見の実際

<p>[満足している点とその理由]</p> <ul style="list-style-type: none"> － 担当教員の研究分野に魅力を感じて選考に入学し専門を履修しているようなもの。よって、専門に関する科目に不満はそうない。 － 大学院らしい専門性の高い授業だから。 － 授業が楽しい。先生方が専門的なところをわかりやすく教えてくれるから － 色々な先生と意見交換できる － 疑問や相談に丁寧に対応していただくなど、いつもこまやかなご指導に感謝しています。個人の研究課題に応じた授業をしていただくなど、ご配慮も頂いています。 － 内容が充実している。毎回の授業の復習予習は大変であるがためになっている － 新しい知見をもらえるから、さらにそれらを基に自分なりの問題意識を深めることができるから。
<p>[改善してほしい点とその理由]</p> <ul style="list-style-type: none"> － 必須の専門科目のとらえ方が難しい。 － 開講しない科目はあらかじめ一覧に載せないでほしい。 － 時間割がよく変更されること － 専門分野で小学校と中学校の専修免許取得の為に充てられる単位が分かれてることがややこしい。心理学の殆どの授業は小中どっちも充てられるのに。

学修コース専門科目の授業について、大学院生が満足している点として挙げているのは、専門性の高い授業を受けられているというものであった。大学院への進学を希望した学術的・専門的な側面での充実感が授業より得られているという印象が見られた。その一方で、改善してほしい点として挙げているのは、研究科／教育実践総合専攻／学修コース共通科目の授業についての感想・意見で見られたものと共通しており、開講時間の変更に関するものであった。また、一部の授業科目の開講年度や専修免許状に対応する科目設定の分かりづらさなども指摘されていた。免許状に対応する科目設定については、課程認定といった制度上の制約もある点若干いたしかたないが、大学院生から見て取得したい教員免許状に対応する授業科目を把握しやすい工夫などは必要である。

3) 研究・学習環境についての感想・意見

研究・学習環境（設備・備品・消耗品等）について、大学院生から寄せられた感想および意見は、表7のとおりであった。

大学院生は、現状の研究・学習環境（設備・備品・消耗品等）について、基本的に満足しているであり、改善してほしい点として挙げているのは、清潔で安全な学習環境に加えて、個別の学習スペースの確保であった。これは、大学院生が満足している点で挙げたものと対になるものであり、学生によって学習スペースの確保状況に差異があることが推察されるのであった。

表7. 研究・学習環境についての感想・意見の実際

<p>[満足している点とその理由]</p> <ul style="list-style-type: none"> － 研究室が与えられるので、行き場のない自分でも、過ごしやすい。 － 理系棟の研究室が充実している。 － 予習復習・研究が行いやすい。 － アクティブラーニングプラザは照明、グループ討議がしやすい。
<p>[改善してほしい点とその理由]</p> <ul style="list-style-type: none"> － 個人の学習スペースを増やしてほしい － 全てにおいてキャンパスが汚い。新しいはずのアクティブラーニングプラザも汚い。管理はなされているが、清掃がなされていない。 － 理系棟と文系棟の廊下が、昼とても暗い。 － 研究室にパソコンを一台設置してもらいたい。研究で使用するため。

4) 研究成果の発表についての感想・意見

アンケート調査実施時点では、口頭発表については、すでに行ったことのある大学院生はならず、全員がこれから行う予定であると回答していた。また、論文執筆については、1名がすでに行ったことがあると、8名がこれから行う予定であると回答していた。作品・演奏・競技等については、すべての大学院生が該当しないもしくは予定はないと回答していた。研究成果（口頭発表／論文執筆／作品・演奏・競技等）の発表について、大学院生から寄せられた感想および意見は、表8のとおりであった。

回答したほとんどの大学院生が、口頭発表や論文執筆の過程にあり、指導教員からの指導および支援に満足していると様子であった。この質問項目では、改善してほしい点の指摘事項は1つも見られなかった。

表8. 研究成果の発表についての感想・意見の実際

<p>[満足している点とその理由]</p> <p>○口頭発表</p> <ul style="list-style-type: none"> － 教員との会話が面白い。 － 私の所属する研究室の担当教員は、研究に関して非常に親身になって指導して下さる。 － 研究に関しても学びに関しても、多方面からの価値観の存在とそのあり方から共に考え、教えて下さる。したがって、すべてに対して満足してる。 － 先生に相談しやすい。 － 発表の機会を与えてくださることに感謝しています。 － 論文や発表、それに関わる調査の方法など、お忙しいにも関わらずきちんとご指導くださってありがたいです。 － 週1回でゼミを行っておりしっかりと指導や支援をしてもらっています － 丁寧に自分の問題意識を深める時間を与えてくださる点ありがたいです。 <p>○論文執筆</p> <ul style="list-style-type: none"> － 頻度、時間、方法に不満はない。 － 先生に相談しやすい － 丁寧に指導して下さり満足している － 論文紹介や分析を一緒にしていただきました。実際に執筆はまだですが、少しずつ書き方を教えていただいているものと思っています。また、内容についてもご相談しやすいです。

<p>— 論文にかかる研究の背景を深めるためのさまざまな視点を示唆して下さるところがありがたい。</p> <p>○作品・演奏・競技等 回答なし</p>
<p>[改善してほしい点とその理由] 回答なし</p>

5) その他大学院での学習や生活全般についての感想・意見

これまでの質問項目のほかで、大学院生から寄せられた感想・意見の実際は、表9のとおりであった。採用試験対策を含めた学習機会の拡張を期待する要望が見られた。

表9. その他大学院での学習や生活全般についての感想・意見の実際

<p>— 教職大学院ができたおかげで、修士課程の教員のマイノリティ感は否めない。</p> <p>— 教員採用試験の説明会をもっとしてほしい。大学院の授業と重なることが多い。</p> <p>— 集中講義に日程を早くに教えてほしいです。</p> <p>— 他大学の授業を聞きに行ける機会があると良いなと思うことがあります。</p>

4. おわりに

教育実践総合専攻の大学院生を対象としたアンケート調査から、大学院生は、専門性の高い授業や少人数の授業、指導教員による熱心で丁寧な研究指導などに、満足を感じていることを確認することができた。その一方で、授業の開講時間や時間割の変更などの授業実施に関わる側面で現状不満を感じており、改善を期待していることが明らかとなった。これらの学生が不満を感じている部分のいくつかには、比較的容易に対応可能なものも含まれているのではないかと思われる。この点から着手して、学習環境の改善を図っていくことが取り組みやすく、大学院生の満足度も高まることにつながると期待される。

他方、今年度のアンケート調査の回答率は、平成29年度と同様に低調であった。教育改善を進めるにあたって、大学院生の実際の感想や意見を把握することは重要であるため、アンケート調査の実施方法などについても、再検討する必要がある。今年度は、大学院生への配布と集計の簡易化を目的として、Web回答方式を採用したが、回答率は十分なものではなかった。研究科共通科目、教育実践総合専攻共通科目でのアンケート実施の案内を行うことや調査の実施期間の見直し（例えば、後期の履修科目の申請時など）も来年度以降の課題と言える。

第二部 鹿児島大学大学院研究科の教育改善に関する活動報告

教育改善アンケート

本アンケートは、大学院研究科の教育改善の目的で実施するアンケートです。このアンケートの結果は、集計され、個人情報は公表されません。

※匿名

調査期間：平成30年7月31日（火）17時



0. あなたの学年を教えてください。

学年

1つだけ選択してください。

1年

2年（1年次）

1. 「研究科共通科目（2年生以上）」、「教育実践総合専攻共通科目（1年生）」「学修コース共通科目」の授業について、あなたの考えを教えてください。

満足している点とその理由

改善してほしい点とその理由

2. 「学修コース専門科目」の授業について、あなたの考えを

01 全編全章

1つだけ選択してください。

すべて良い

どちらか行う予定である

予定はない

満足している点とその理由や改善してほしい点とその理由

改善してほしい点とその理由

02 部分編章

1つだけ選択してください。

すべて良い

どちらか行う予定である

予定はない

満足している点とその理由や改善してほしい点とその理由

改善してほしい点とその理由

教えてください。

満足している点とその理由

改善してほしい点とその理由

3. 研究・学習環境（設備・食品・生活品等）について、あなたの考えを教えてください。

満足している点とその理由

改善してほしい点とその理由

4. 研究設備の充実について、あなたの考えを教えてください。

(注：1. 満足している点とその理由です。)

03 全編全章

1つだけ選択してください。

すべて良い

どちらか行う予定である

予定はない

満足している点とその理由や改善してほしい点とその理由

改善してほしい点とその理由

5. その他大学での学習や生活面について

改善・充実の要望があれば、具体的に教えてください。

ご報告ありがとうございました。

鹿児島大学大学院研究科事務局

編集後記

この1年間は、慌ただしく経過したような気がします。その中で教育改善委員会は、様々な新しい取り組みをしてきたと思います。特に前期・後期における授業アンケートは manaba を活用し、受講生が10人以上の1人の教員が担当している全ての授業で行ったことは画期的なことだと思います。また授業アンケートが最優秀であった教員を教育学部ベストティーチャー賞候補者として全学に推薦できたことは、授業改善に対する教育学部教員の関心を深める上で有意義であったと思います（勿論運用上注意していくべきことは大いにありますが）。導入時には批判が多かったベストティーチャー賞ですが、今後鹿児島大学の教育改善に向けて有効に運用されていくことを望みます。また今年度は、学生FD委員たちが強い意欲を持ち、教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウムに向けて主体的に活動してくれたことも忘れられません。今回はテーマも教育学部の授業に絞られてグループディスカッションも有益なものでしたし、会の運営も学生FD委員たちが主体的に行う姿も心強く見えました。今後教育学部における教育改善が進んでいくことを祈り擱筆します。（日隈）

授業アンケートを担当しました。教育学部では、授業の質向上を目的とした授業アンケートを、比較的早い10年以上前から続けてきましたが、近年では共通教育をはじめとして、このような取り組みが広がっています。しかしながら、質問内容や実施方法については前年度を踏襲する形で進めてきましたので、本年度は他の取り組みを参考に、内容と方法を大幅に見直すことにしました。質問内容は、いくつかの取り組みを参考に一般的な内容を中心に変更し、また実施方法は紙媒体から manaba システムへと効率化を図りましたが、課題も山積みです。本取り組みの目的は、教員が自らの授業を振り返り改善していくことにありますが、最も重要なその点が不十分だったと反省しています。任期が残り1年ありますので、次年度はこの点を中心に検討し、教育学部全体の教育改善につながるよう尽力したいと思います。（浅野）

今年度は、大学院担当として教育改善委員会に携わらせていただきました。現在大学院は、教育実践総合専攻と学校教育実践高度化専攻の2つの専攻があり、双方が特色のある教育研究活動を展開しています。特に、教育実践総合専攻では、各教員が自身の専門性を発揮した授業や研究指導が行われており、それらには、大学院生も満足していることが今回の大学院生のアンケートの回答から伺えます。一方で、改善が期待されている点もあります。FD活動や本報告書が報告のためのアンケートにとどまらず、改善のためのアンケートとなるように、今後の大学院の教育研究のPDCAサイクルの推進に活用していただければ幸いです。（内ノ倉）

教育改善委員として、学ぶことの多い2年間を過ごさせていただきました。今年度は、教員の授業公開・授業参観を担当しました。昨年までの6年間、授業参観者の数はのべで30人程度とほとんど変化しなかったのですが、今年も新たな取り組みは行ったものの、昨年並みの結果となりました。毎年教員全体の数が少しずつ減っているなか、参観者数が変化しないことは喜ばしくもありますが、授業参観を行う教員が全体の15%程度という現状をどのように改善していくのかは、さらなる課題となりそうです。（梅林）

第二部 鹿児島大学大学院研究科の 教育改善に関する活動報告

本年度は、教育改善委員として、学生 FD 委員会の委員長・副委員長とともに、合同 FD シンポジウムの企画運営に関わりました。学生 FD 委員会の運営も、本来は学生の主体的・自発的な活動が望ましいのですが、実態はそうではありません。委員会を継続していくことの難しさを感じています。今年度は意識の高い学生たちに関わってもらうことができましたが、委員の選出も含め、今後をどうするか改善の余地があります。合同 FD シンポジウムも同様に開催時期の再考とともに、教員・学生ともに参加者を増やす方策を考える必要があります。(中島)

今年度、初めて教育改善委員会に参加しました。これまでも「自分の」授業をより良いものにするにはどうしたらいいかについては考えてきましたが、委員会活動を通して、学部全体の教育活動をより良いものにするにはどうしたらいいかを考えることができました。何をもって「良し」とするのか、その基準はあいまいで多義的なものであると思いますが、日々の模索が少しでも多くの方が良いと思える「最適解」に近づく助けになればと思います。(島)